

〔研究論文〕

日本人大学生の海外経験における異文化間葛藤事例に関する研究 —自由記述式質問紙調査の結果から—

園 田 智 子

要 旨

本研究は、日本人大学生が海外経験において、どのような文化的葛藤事例を経験したのか、また、それらの経験には類似性が認められるのかについて、1か月以上の海外滞在経験を有する日本人大学生を対象に自由記述式の質問紙調査を実施した結果を分析したものである。その結果、日本人大学生の海外経験における葛藤事例は「パブリック場面における葛藤」「居住場面における葛藤」「アカデミック場面における葛藤」「友人関係における葛藤」「見知らぬ人との交流における葛藤」「異性関係における葛藤」の6つの大カテゴリーと、13の中カテゴリーに分類された。これらのカテゴリーには、積極的な説得交渉のアサーションスキルが必要な場面と、人間関係形成のためのアサーションスキルが必要とされる場面の両方が含まれていた。ケースの数が多かったのは説得交渉の場面であったが、滞在期間が長い学生ほど人間関係形成の場面における葛藤事例を経験していることも明らかとなった。

【キーワード】 アサーション 異文化間葛藤 海外経験 人間関係形成

1. 研究の背景

日本の高等教育機関において、グローバル人材育成の必要性が重視されるようになってきている。文部科学省（2013）では、「世界的な競争と共生が進む現代社会において、日本人としてのアイデンティティを持ちながら、広い視野に立って培われる教養と専門性、異なる言語、文化、価値を乗り越えて関係を構築するためのコミュニケーション能力と協調性、新しい価値を創造する能力、次世代までも視野に入れた社会貢献の意識などを持った人間」（「産学官によるグローバル人材の育成のための戦略」平成23年4月28日）としている。その中でも、コミュニケーション能力はグローバル人材の第一の要素として挙げられている重要事項であるが、実際には語学能力の向上、特に英語能力の向上について目標や計画が立てられることが多く、海外における異文化間コミュニケーション能力の向上に

ついて具体的に検討されているとは言い難い。

このような中、園田（2010,2014）は、日本人大学生のコミュニケーションの特色についてアサーション^(注1)の観点からの研究を行った。園田（2010）では、日米中泰の四か国の大学生のアサーション度を比較し、他の3か国と比較して日本人大学生のアサーション度が有意に低いことを明らかにした。また、園田（2014）では、国内外のアサーション場面の収集のため文献調査を行い、その結果、日本国内における葛藤事例はビジネス場面に偏っている一方で、海外場面では幅広く葛藤事例が見られ、自分の行動規範が通用しない海外場面では異文化間葛藤は避けられないものであることがわかった。しかしながら、こういった異文化間葛藤の克服に向けた教育的実践やその検証に関する研究はまだ始まったばかりであると思われる。ここで、海外における葛藤解決に関連したソーシャルスキルトレーニングの実践的な取り組み及び研究を行った田中・高濱（田中・高濱，2008；高濱・田中，2009 a；高濱・田中2009 c）の研究を取り上げたい。田中らは、米国の対人関係におけるソーシャルスキルトレーニングをロールプレイで学習する方法を学生の留学前に行い、学習内容の詳細及び効果を実証的に検証した。スキルの選定は、田中（1994）及び平木（2000）のアサーショントレーニング（主張訓練法）をもとに選ばれ、「聴く態度（笑顔・アイコンタクト）」「友人を作る」「先生に質問・相談に行く」「主張・交渉する」「授業で自分の意見を言う」など10項目が挙げられている。実践では、1年未満の交換留学生にソーシャルスキルトレーニングを行い、その結果、徐々に学習者の自己表現力が向上していったこと、文化理解、対人関係形成への自信や意欲の向上、不安の低下が見られたことを報告している（田中・高濱2008, 高濱・田中2009 a）。また、その後、学生の留学先における現地調査でスキルが利用されていることも確認されている（高濱・田中2009 c）。これら一連の研究は、海外におけるコミュニケーショントレーニングの必要性を実証的に明らかにした貴重なものである。ただし、対象国は米国に限られており、海外生活における様々な場面において日本人学生が感じる困難についての基礎的な研究について、さらなる検討の余地があると考えられる。

2. 研究目的

本研究は、日本人大学生の海外経験において、どのような異文化間葛藤事例を経験したのか、広く事例を収集し、その事例のカテゴリー分類を試みて、内容の詳細を分析することを目的とした。さらに、それぞれの葛藤場面でどのようなコミュニケーションのスキルが必要とされていたのかも検討することとした。

3. 研究方法

3. 1. 研究の手続き

研究の方法は、質問紙調査法を用い、自由記述式の質問紙調査票を独自に作成し、配布回収し、そ

のデータを分析した。

作成した質問紙は、1 フェイスシート、2 海外における異文化間葛藤の事例の記述、3 日本国内における異文化間葛藤事例の記述、4 代表的葛藤事例における行動予測（選択式）の4つで構成された。このうち、本論では1, 2について取り上げ、分析を行う。また、質問紙調査の実施後、回答者の中から1年以上海外留学の経験がある学生6名に対し、個別にフォローアップインタビューを実施したが、そのデータの分析は別の機会に行う予定である。

質問紙の配布回収に当たって、筆者の勤務先の大学の学生に対しては直接配布を行い、他大学においてはメールによる配布回収を行った。質問紙の回答を受け取る際には送信者へ返礼を送った後、できるだけ早急に各個人のメールアドレスを削除するなど、個人情報の管理を厳重に行った。

結果の分析は、KJ法（川喜多, 1967）を用いた。まず、調査協力者の回答した事例の記述内容をデータとして切片化し、カード化した。その後、意味内容が近いカードをまとめてグループを形成し、そのグループの内容を反映するカテゴリー名をつけた。これらの分析の客観性を高めるため、筆者のリサーチアシスタントである学生1名に分類を依頼した結果、一致率は58.5%であったため、協議を行い、再度分類を行った結果、一致率は83.5%となり、上位カテゴリーについての差異は見られなかった。よって、これらの分析を採用することとした。

3. 2. 研究協力者

本研究の調査対象者は、すでに日本に帰国している1ヶ月以上の海外経験を有する日本人大学生、大学院生とした。研究協力者の所属大学は著者の所属大学を含め、関東甲信地域6大学、関西地域3大学、東北地域2大学、九州地域1大学の計12大学で、調査協力者の数は全体で104名、有効回答数は、56名であった。有効回答数が約50%と少なくなったのは、回答に、「海外滞在中、異文化間コミュニケーション上のトラブルや問題を何も感じなかった」と回答した学生や、「英語がぜんぜん話せなくて、ほとんどコミュニケーションできなかった」「英語が通じなくて大変だった」など、単純に言語力の問題のみを指摘した回答が多かったためである。特に1ヶ月程度の語学研修など、短期滞在者では、異文化間コミュニケーション上の問題を経験していない、あるいは認識していないケースが多かった。有効回答とした56名の回答からは、126件の具体的な異文化間葛藤事例が抽出され、その内容を分析することとした。

なお、有効回答とした56名のうち男性が16名、女性40名であった。また大学院生の回答は2件のみで、残り54件は学部学生であった。海外渡航経験については、1ヶ月程度の短期滞在者が39名で、半年以上の交換留学を中心とした長期滞在者は17名であった。渡航先国は多い順に、アメリカ、オーストラリア、イギリス、ニュージーランド、中国、台湾、韓国、マレーシア、イタリア、タイ、ルーマニアであった。

4. 結果

4. 1. 事例内容のカテゴリ分類の結果

図1に事例内容をKJ法によって分析した結果を示した。分析の結果、大カテゴリーとして「パブリック場面における葛藤」「居住場面における葛藤」「アカデミック場面における葛藤」「友人関係における葛藤」「見知らぬ人との交流場面における葛藤」「異性関係における葛藤」の6つに分類された。ここでは、それぞれのカテゴリーについて以下にその結果を検討する。

【1. パブリック場面における葛藤 (33)】

＜パブリック場面1 交通機関における葛藤＞

バス・電車内での葛藤 (4)
 空港場面における葛藤 (5)
 タクシー利用時における葛藤 (2)

＜パブリック場面2 サービス場面における葛藤＞

飲食店での葛藤 (6)
 購買場面における葛藤 (5)
 契約場面における葛藤 (1)

＜パブリック場面3 ホテルにおける葛藤＞

ホテル内での葛藤 (2)

＜パブリック場面4 危機時における葛藤＞

警察署における葛藤 (3)
 病院での葛藤 (1)

【2. 居住場面における葛藤 (34)】

＜居住場面1 ホームステイにおける葛藤＞

食事に関する葛藤 (11)
 コミュニケーション不足 (5)
 家庭内ルールに関する葛藤 (4)
 ホストファミリーの不在 (1)
 時間感覚に関する葛藤 (1)
 不快な勧誘・押し売り (1)
 金銭問題 (1)

＜居住場面2 学生寮シェアハウスにおける葛藤＞

共有キッチンにおける葛藤 (4)
 ルームメイトの騒音問題に関する葛藤 (3)
 他者の無断宿泊に関する葛藤 (2)

＜居住場面3 一般賃貸住居等における葛藤＞

貸家の大家との葛藤 (1)

【3. 大学内・アカデミック場面における葛藤 (13)】

＜大学内での葛藤1 授業内での葛藤＞

授業内発話・ディスカッション (3)
 クラスメイトとのコミュニケーション (3)
 クラスメイトによる私物の盗難 (1)
 教員の誤解 (1)

＜大学内での葛藤2 授業外での葛藤＞

質問ができずトラブル (3)
 手続き上のトラブル (1)
 大学の入構に関するトラブル (1)

【4. 友人関係における葛藤 (32)】

＜友人知人との交流場面における葛藤＞
 外国語での会話に入っていけない (6)
 友人とのつきあい (5)
 歴史的議論における葛藤 (4)
 友人との旅行・外出場面での葛藤 (3)
 友人との口論・喧嘩 (2)
 希望をいちいち聞かれることの苦痛 (2)

＜友人関係形成に関する葛藤＞
 自分から話しかけられない (4)
 友人作り (3)
 友人との口論・喧嘩 (2)
 日本語学習の手伝いへの不満 (1)

【5. 見知らぬ人との交流場面における葛藤 (7)】 【6. 異性関係における葛藤 (7)】

道聞きでの葛藤 (3)
 見知らぬ人からの話しかけ (3)
 子供との会話 (1)

異性からのアプローチへの返答 (3)
 誤解・仲違い (2)
 ハラスメント場面への対応 (2)

(図1) 日本人大学生の海外経験における異文化葛藤事例分析 (KJ法内容分類)

① パブリック場面における葛藤

一つ目のカテゴリーは、【パブリック場面における葛藤】とした。このカテゴリーはさらに、＜交通機関における葛藤＞＜サービス場面における葛藤＞＜ホテル等における葛藤＞＜危機時における葛藤＞に分類された。これらの事例からは、海外へ行くときに避けては通れない公的な場面で様々な葛藤が起こっていることがわかる。例えば、空港のカウンターでのチケットの発券ミスになかなか対応してもらえなかったといった経験や、飲食店で注文と異なるものを出されたのに何も言えなかった等の経験、買い物するつもりのないものをしてこく売りつけられて、最終的には全く不本意なまま購入してしまったケースなどがあった。ある日本人大学生は、「日本では、店員は客に対してもっと丁寧な態度で接するので、正直、その押しの強さに驚いて、どうしていいかわからなくなった。今考えたら、その場で適当なことを言って、逃げればよかったけど、そのときは、そんなことも考えられなかった。どうして知らない、買わない、自分の好きなデザインじゃない、とはっきり言えなかったのか思い出すと悔しい思いでいっぱいになる」と記述していた。また、海外の警察での場面では、緊急事態において、相手に自分の事情や対応してほしい内容をうまく伝えられずに、結局、学生側が物理的な不利益を被ったという事例も見受けられた。これらの公的場面は、基本的に相手の対応や態度に対し、積極的に説得、交渉するアサーションスキルが求められている場面であった。

② 居住場面における葛藤

二つ目のカテゴリーは、【居住場面における葛藤】とした。さらにこのカテゴリーは＜ホームステイにおける葛藤＞＜学生寮・シェアハウスにおける葛藤＞＜一般賃貸住居等における葛藤＞の三つに分類された。中でも、ホームステイにおける葛藤は、件数が多く、様々な葛藤が起こりやすいこと

が考えられる。しかし、日本人大学生がホームスティファミリーと何らかの交渉を行ったケースは少数で、結局日本人大学生側が不満を抱えながらも我慢したり、解決されなかったとしている事例が多かった。ある日本人大学生は、「本当に食事がきつかった。ほとんど野菜もなくて、毎日肉と冷凍食品ばかり。でも、出してもらったから食べないと、と思って毎食我慢して食べていたら、最終週に体調を崩してしまった。今思えばなんであんなに無理して食べていたのかわからない。外食するとか、自分で作るといえばよかったけど、でも、今また同じ状況でもやっぱり何も言えないかもしれない」と記述している。

学生寮やシェアハウスにおける葛藤は、騒音問題やキッチンの共有問題など類似した例が多く見いだされた。中には不満を感じながら、同じキッチンを使う他国のルームメイトが洗い場に放置する食器や調理器具類を1年間洗い続けていた日本人大学生もいた。居住場面では、短期長期にかかわらず、日常生活を共にする他者がいることが多いため、特に人間関係に配慮しつつ、説得交渉を行うというアサーションのスキルが必要とされており、葛藤解決の難しさを感じている様子が見られた。

③ アカデミック場面における葛藤

次に、大学内で起こる様々な葛藤を【アカデミック場面における葛藤】とした。このカテゴリーは、さらに<授業内での葛藤>と、<授業外での葛藤>に分類された。授業内では、クラスメイトとのコミュニケーションやトラブル、クラス内での発言などがあげられた。ある日本人大学生は、「修了間近のある日、クラスの先生から、個人的な性格かもしれないけど、クラス内であなたは一番発言が少なかった。もっとクラス内で発言するようにならなければならないというようなことを言われた。自分でもクラスでもっと発言したいと思っていたけど、英語のスピードについていけず、クラスメイトが話し終わるのを待っていると、また誰かが話し出して、なかなか発言できずにいた。それを個人的な性格の問題にされたのがショックだったし、すごく悔しかった。しかし、その場では、先生に、はい、すみませんでしたと謝りました。部屋に帰ってから悔しくて涙がでてきました。」と記述している。

一方、授業外では、手続き上のトラブルを経験した学生が多かった。また、学校関係者から説明を受けた時に、よくわからなかったにもかかわらず、わからないと伝えたり質問したりできずにいた学生もいた。その結果、理解不足で待ち合わせに間に合わなかったというようなケースもあった。このように、アカデミックな場面では、積極的に発話することや議論することの重要性が示唆された。また、学内でのトラブルについても、相手に対して説得、交渉をする必要があるとともに、わからないときにはわからないと言う、あるいは、質問をするという基本的なアサーションのスキルが必要とされていた。

④ 友人関係における葛藤

【友人関係における葛藤】のカテゴリーは、さらに<友人関係形成における葛藤>と<友人知人との交流場面における葛藤>の2つのカテゴリーに分類された。海外で、親しい友人を作りたいと努力してもなかなかうまく友人ができない例や、友人との喧嘩の場面も含まれている。このカテゴリーで

注目したいのは、知人友人との外出や旅行における葛藤で、日本人大学生ができるだけ自分の希望や要求を抑えて、相手に合わせようとしている様子が顕著だったことである。事例では、その結果、相手に不審に思われたり、怒りをかかったりするなど関係性がむしろ悪化しているケースが目立った。ある学生は、「(外国人の友人との2人旅で)こんなに何でも相手の言うことを聞いて相手に合わせようとしてあげているのに、なんで私が怒られなきゃいけないのかと頭にきた。でも、彼女に、何がしたいのか、どこへ行きたいのか、ちゃんと伝えてくれなきゃわからないよ。Aちゃんは私と旅行するのが楽しくないの?何か一緒にしたくないの?とすごく悲しそうに言われて、自分の意思を伝えることの大切さを知りました。今ならもっと最初から自分の希望をはっきり伝えて、お互いの意見を調整してもっと楽しい旅にできたと思います」と記述している。このカテゴリーでは、主に、自分の気持ちを積極的に伝えることや、自分の希望をはっきり伝えることなど、自己開示や人間関係形成のためのアサーションのスキルが必要とされていた。

⑤ 見知らぬ人との交流場面における葛藤

五つ目に、【見知らぬ人との交流場面における葛藤】のカテゴリーがまとめられた。街中で迷って見知らぬ人に勇気を出して話しかけたが、何回も聞き返すことが申し訳なくて、人に聞くのをあきらめ、結局何時間も迷ってホストファミリーの家に帰りついた事例などがあつた。また、エレベーターの中などで、急に全く見知らぬ人から話しかけられたが、驚いてまともに受け答えができず、不審に思われてしまったといった事例も見られた。ある日本人大学生は、「日本の生活では見知らぬ人と気軽に会話する機会はほとんどないので、いきなり親しげに話しかけられること自体に驚いたし、緊張してどうしたらいいかわからなかった」とその時の気持ちを記述している。ここでは、自己開示に係わるアサーションのスキルと、分からないことを聞くという基本的なアサーションのスキルが必要とされていた。

⑥ 異性関係における葛藤

最後のカテゴリーは【異性関係における葛藤】としてまとめられた。突然異性に好意があることを打ち明けられ、困惑した経験や、交際の申し込みを断ろうと遠回しな方法で相手が察してくれることを待っていたが、問題が解決しなかった例など、いずれも女子大学生の事例が多かった。また、相手への態度をあいまいにしていたために、セクシャルハラスメントの被害を受けた事例もあった。異性問題における葛藤においては、はっきりと断わる、自分の気持ちを伝える、いやなことをいやだと伝えるなど、日本とは違う環境であることを意識したストレートなアサーションの表現が必要とされていたことが示唆された。

5. 考察と今後の展開

5. 1. 異文化社会における困難さ

海外生活においては、それが短期間であったとしても、異文化社会の中で、今まで自国にいたとき

とは異なったルールで、言語や文化の異なる人々とコミュニケーションし、その生活に適応していく必要がある。それには、様々な困難を経験することが考えられる。Furnham & Bochner (1982) は、英国内の留学生150名に対して社会的な困難を明らかにするための質問紙調査を実施し、「儀礼的關係」「親しい関係を作る」「公的儀式」「対人接触の開始」「公的場面での意思決定」「主張性」の6つの因子を見だし、中でも対人関係の構築維持に困難が大きいと述べている。この6つの因子は、対象者を日本人学生に限ったものでないが、本研究における【パブリック場面における葛藤】は、「公的場面での意思決定」と、【友人関係における葛藤】には「親しい関係を作る」と、さらに、【アカデミック場面における葛藤】の多くが「主張性」と関連していることなど、類似した点が見られた。また、山本ら (1986) も同様に、米国の日本人学生48名の社会的な困難についての調査を実施し、「社交」「公的場面」「交渉」「接待」の4つの因子が見いだされたとしている。本研究における分類と比較すると、【パブリック場面における葛藤】と「公的場面」、【友人関係における葛藤】と「社交」など一部類似している部分が見られた。このように本調査による結果は、異文化社会における困難さに関する先行研究の内容を支持する結果となった。しかしながら、本研究では、大学生にとって非常に重要な【アカデミック場面における葛藤】を一つのカテゴリーとして示したことや、青年期特有の困難な課題である【異性関係における葛藤】を明らかにした点で従来の研究とは異なったカテゴリー分類の結果を示している。

5. 2. 説得交渉場面と人間関係形成場面

本研究の結果から、日本人学生の異文化社会における困難さは、6つの大カテゴリーに分類されたが、カテゴリー1, 2, 3とカテゴリー4, 5, 6はそれぞれ特徴的な内容となっていると考えられる。前半の三つのカテゴリーは、主に日本人大学生の海外での生活で避けて通れない、公的場面、住居場面、大学場面における葛藤が分類されており全体の件数も多い。これらは、山本ら (1986) のいう「公的場面」や「交渉」と類似しており、いずれも、アサーションのスキルとして、「説得交渉」が必要な場面であると考えられる。青年用アサーション尺度についての研究調査を行った玉瀬 (2001) は、一般的に、人間関係が形成されたのちに、説得交渉が行われる可能性があるとして述べている^(注2)が、今回の事例の分析からは、海外場面においては、渡航後、すぐにも対応を迫られ、説得交渉が必要な場面に次々と遭遇するため、人間関係を形成してからという交渉パターンは用いることが難しいことが示唆された。日本人学生は、海外生活において、言語や文化の異なる親しみのない相手と説得交渉を行う必要に迫られ、なかなかうまく交渉できない場面が多いことが明らかになった。

一方、後半の3つのカテゴリーは、基本的に人間関係形成や維持に関する場面であった。見知らぬ人との出会い、友人作りや友人づきあい、友人とのよい関係の形成維持には、学生自身からの積極的な働きかけやコミュニケーションも重要であると考えられるが、学生の中には、積極的に自分から話しかけられず、ひきこもってしまったり、会話から逃げてしまったり、自分の意見を抑制して相手に合わせようとしている事例も見られた。友人たちが、英語や母国語同士で会話していると、会話に入

れずに孤独だったと回答した学生も多かった。ある日本人大学生が「クラスの友だちが話しているところになかなか入れなくて、いらいらした。英語も上手ではなくて何を話しているかわからないときもあったし、誰かが話し終わるのを待っていると、すぐに誰かが話し出して、結局最後まで黙ってしまふ。ときどき友だちが自分にも話すよういろいろ聞いてくれたけど、急に意見を聞かれても、何も言えなくて気まずくなることが多かった」と述べているように、言語の違いだけではなく、会話のターンも文化によって異なっている可能性があり、日本社会において、沈黙を含めた相互依存的な会話のスタイルに慣れている日本人大学生は、お互いの話したいことを率直にぶつけあう会話の中に入っていけない様子うかがえた。

柴橋 (2005) は、青年期における友人との関係の重要性を指摘し、現代の日本の青年における友人関係は希薄化し、お互いの異質性を認め合うことより、類似性を確かめ合って表面的なつきあいになることが多いと指摘している。それには日本文化の影響もあり、個を主張することが集団からの逸脱と見なされてきたことが影響しているが、真の協調性とは「相手の言い分をよく聞いて尊重すると同時に自分の考えを伝え生かし、調和的な結果を生むこと」だと述べている。Furnham & Bochner (1986) の研究においても「関係形成」が最も困難な課題であるとされているが、日本社会においても人間関係形成の困難を多く抱える日本人大学生にとって、異文化の中の他者と積極的に触れあい、人間関係を作り、それを維持していくことはさらにハードルの高い作業となると考えられる。実際に、後半のカテゴリーは前半のカテゴリーと比較して事例件数自体が少なく、ほとんどが1年単位で交換留学を行った学生から得られた事例であり、1ヶ月程度の短期留学では、近年のSNSの発達なども影響して、もともとある日本国内の人間関係の枠組みを維持したまま海外に滞在しており、また、語学能力も十分でないことも多く、対人関係形成に関する葛藤を感じる間もなく滞在期間が終わってしまうケースが多いのではないかと考えられた。その中でも、ホームステイの経験は、説得交渉のアサーションスキルに加え、ホストとの人間関係の形成や維持のためのコミュニケーションスキルも必要とされており、日本人大学生にとって、重要な機会になっていることが考えられた。

5. 3. 本研究の限界と今後の展開

最後に、本研究の限界を述べておきたい。本研究の調査結果は調査対象者56名、事例件数126件という限られた数の調査分析に基づいた結果である。海外における経験は、渡航国や時期、期間や学生の性格など様々な要因によって、一人ひとり個別の異なった事例を持つものであると考えられるため、今回の結果が海外経験におけるコンフリクトの全容を正確に示したものとは言えない。しかしながら、今回の研究によって、日本人大学生の海外経験における困難さや葛藤の一部を明らかにすることができた。今後は、本研究における事例及びカテゴリー分析を参照しながら、特に事例件数の多かったものや、解決が困難であった事例、解決が必要不可欠な事例など、学生にとって重要であると思われる事例を抽出し、実際の教育場面で使用することのできる教材シートを作成する予定である。さらに、作成した教材を実際の学生に試用し、その効果を検証することが次の課題である。

<注>

- 1) 「アサーション (Assertion)」について、平木 (1993) は、「自分の気持ち・考え・信念などが正直に、率直にその場にふさわしい方法で表現される。そして、相手が同じように発言することを推奨しようとする態度」であるとしており、攻撃的 (Aggressive) でもなく、非主張的 (Non-Assertive) でもない、アサーティブなコミュニケーション能力を身につけることによって、気持ちのいい人間関係が築けるとしている。
- 2) 玉瀬ら (2001) の作成した「青年用アサーション尺度」は、既存のアサーション尺度112項目の中から27項目を選択し、大学生に対して予備調査を実施し、修正、再調査を繰り返えし、その結果、信頼性、妥当性のある2因子16項目の尺度が作られた。一つ目の因子は「関係形成因子」であり、人とのよい関係を形成することに係わる項目である。2因子目は、「説得交渉因子」で、何らかの葛藤場面で、相手に対し説得や交渉を行うことにかかわる因子である。玉瀬ら (2001) では、この2つの因子について、一般的に人間関係形成が行われた後、説得交渉が行われることが考えられると述べている。

<付記／謝辞>

本研究は、平成24—26年度科学研究費補助金・基盤研究 (C) 「異文化間葛藤場面におけるコミュニケーション・トレーニングの教材開発に関する研究」(課題番号24520567／研究代表者:園田智子) の助成のもとで行われた。質問紙への回答、回収に協力して下さった全国の大学生の方々、留学派遣担当の教職員の皆様に心から感謝申し上げます。

<参考文献>

- 川喜田二郎 (1967) 『発想法 - 創造性開発のために』中公新書。
- 柴橋祐子 (2005) 「青年期の人間関係におけるアサーション」『現代のエスプリ450アサーショントレーニング—その現代的意味—』至文堂。
- 園田智子 (2010) 「異文化間コミュニケーション場面におけるコンフリクト事例とアサーション—関連文献からの示唆—」『群馬大学国際教育・研究センター論集』第13号, 1-13.
- 園田智子 (2014) 「日本人大学生と海外大学生のアサーション度に関する調査研究」『異文化間教育』20号, 128-137.
- 高濱愛・田中共子 (2009c) 「在米日本人留学生による滞米中のソーシャル・スキル利用—留学前ソーシャル・スキル学習の受講者と非受講者の場合—」『留学生交流・指導研究』Volume11, 107-117.
- 高濱愛・田中共子 (2009a) 「アメリカ留学準備のためのソーシャル・スキル学習セッションの試み—対人関係の開始に焦点を当てて—」『異文化間教育』30, 104-110.
- 田中共子・高濱愛 (2008) 「米国留学準備のためのアメリカン・ソーシャルスキル学習: 大学での学習場面への対応を課題とした中級セッションの記録」『岡山大学文学部紀要』第49号, 31-48.
- 田中共子 (1994) 『アメリカ留学ソーシャルスキル 通じる前向き会話術』アルク。
- 玉瀬耕治・越智敏洋・才能千景・石川昌代 (2001) 「青年用アサーション尺度の作成と信頼性および妥当性の検討」『奈良教育大学紀要』第50巻第1号, 221-231.
- 平木典子 (1993) 『アサーション・トレーニング—さわやかな自己表現のために—』日本・精神技術研究所。
- 山本多喜司 (1986) 「異文化環境への適応に関する環境心理学的研究」S60科学研究費補助金研究成果報告書。
- Furnham, A. & Bochner, S. 1986 Culture shock. Oxford: Methuen Inc.

A Study on the Cross-Cultural Conflicts Experienced by Japanese Students during their Overseas Stay: A Focus on the Results Derived from a Questionnaire with Free Descriptive Answers

SONODA Tomoko

This study investigated the various types of cross-cultural conflicts that Japanese university students experience during their stay overseas and whether or not similar features exist in each conflict. We analyzed the results by conducting a survey by questionnaire that asked participants to write free descriptive answers. The questionnaire was directed at Japanese university students with more than one month of experience studying overseas.

As a result, six different categories of conflicts experienced while staying overseas were identified as follows: 1) Conflict in a public situation 2) Conflict in student accommodation (i.e. dormitory or home stay) 3) Conflict within an academic context 4) Conflict in relationships with friends 5) Conflict in an exchange with strangers 6) Conflict in relationships with the opposite sex. These categories were classified based on two factors. First, a persuasion-negotiation factor was found in the following three categories: 1) Conflict in a public situation 2) Conflict in student accommodation (i.e. dormitory or home stay) 3) Conflict within an academic context. And second, a human relations formation factor was found in the following three categories: 1) Conflict in relationships with friends 2) Conflict in an exchange with strangers 3) Conflict in relationships with the opposite sex. The numbers of persuasion negotiation factor cases were many. It also became clear that as the length of time spent overseas became longer, the students experienced more conflict situations in terms of human relationship formation.